

絵本の楽しさ 大人にこそ

元テレビ局員 狛江の女性が一人出版社

狛江市の女性が1人で立ち上げた「小さい書房」が、1年以上をかけて1冊目の「青のない国」を刊行する。大人が読んでも、子どもと読んでも楽しめることを目指して作られた「大人のための絵本」だ。



安永則子さん

育児で気付いた普遍性

安永則子さん(42)は元TBS記者。34歳で長女を、2年後に長男を出産した。長く報道に携わり、出産後は事業部門で番組関連の書籍づくりをした。仕事は大好きで「滅私奉公」と思っていた。

だが、子育ては発見の連続だった。「紙がインクを吸うように、できることが増える」。成長していく子を見守る喜びから、「夕食

だけは一緒に食べたい」と思うようになった。「納得のいく仕事をして、子どもを食を食べるには」。悩み抜いて、退職して起業する道を選んだ。

出版を選んだのも子育ての経験からだ。毎日1冊、絵本の読み聞かせをした。米国の作家シエル・シルヴァスタインの「おおきな木」など、大人でもハッとさせられるものがあること

を知った。メッセージ性のある、文字通り「絵のある本」。映像とナレーションのテレビとも似ている、とも感じた。

だが、普通の大人は、子どもがいないと絵本コーナーには立ち入らない。「もったいない」と思った。

悩んでいたとき、たまたま「一人出版社が増加している」という記事を目にして、「これだ」と思った。

夫の賛同も得て、大人のための絵本を専門にする出版社をつくる構想が生まれた。大手出版社が手がけていない、というビジネスとしての狙いもあった。

2013年2月、1人で「小さい書房」をつくった。安永さんから作品の

構想を投げかけ、共感してくれる作家を探した。以前から作風に魅力を感じていた絵本作家の風木一人さんにトークショーで手紙を渡し、快諾を得た。1年近くやり取りを重ねて完成したのが「青のない国」だ。

青色がない国で、一人の男がこれまで見たこともない色の花を見つけ「青い花」と話題を呼ぶ。しかし今度は「青い石」が見つかり……。そんな物語が、白、黒、青で描かれた絵とともに展開する。

「何が大切かは、自分で決める」。帯にはこう記される。物語のメッセージでもあり、安永さんが仕事と子育ての両立に悩むなかで、感じたことでもある。

今は、夕方に子どもを保育施設から引き取り、夕食をとって夜10時には就寝する。朝3時か4時には起きて仕事をやる。

「自分の生き方を見つめ直したい人にぜひ手にとってほしい」

発売は18日。A5判64頁で1300円(税抜き)。

全国の書店、ネット書店で注文できる。問い合わせは「小さい書房」(03・5761・4633)。

(千葉雄高)

青のない国

風木一人/作 長友啓典・松昭教/絵



小さい書房

「青のない国」の表紙。グラフィックデザイナーの長友啓典さん、ブックデザイナーの松昭教さんが絵と装丁を手がけた